

Title	幼児の指しゃぶりに関する一研究
Sub Title	A study on fingersucking in infants
Author	金子, 保(Kaneko, Tamotsu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1969
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.9 (1969.) ,p.77- 84
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000009-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

幼児の指しゃぶりに関する一研究

A Study on Fingersucking in Infants

金子保

Tamotsu Kaneko

1. 序

幼児の指しゃぶり (fingersucking) または、拇指しゃぶり (thumbsucking) の習癖の問題は、はじめ歯科医によって特に、歯列矯正の問題として警告されたり、細菌の経口感染の危険が説かれたりしたところから生じて来たといわれている¹⁾。しかし、その後の研究の結果、幼児期の指しゃぶりによって歯列に悪い影響があるということはないし、また、指しゃぶりの子ども達が、そうでない子ども達より経口感染による胃腸疾患や口内炎に罹患しやすいこともないということが分って来た。

そこで、現在では、幼児の指しゃぶりの問題は、主として精神医学的・臨床心理学的な立場から、とりあげられている。しかも、精神医学的立場からのこの問題への理論的接近は、精神分析学者によって殆んど独占されて来たといつてよい。その理論によれば、指しゃぶり行動は、幼児の libido の一様式であり、「性本能の最初のあらわれである」²⁾脚注1) というのである。

このような見解が S. Freud によって、「必ずしも、すべての子どもが拇指をしゃぶるものとは限らない。口唇帯の性的意義が體質的に強い子どもに限って見られると考えられる。」³⁾ というように表明されて以来、指しゃぶりは一般に幼児の自慰 (larval masturbation) と解釈されるに至っている。

ところが、そのために、周囲のおとな達が、指しゃぶり行動を必要以上に騒ぎ立て、不安に思う傾向が生じて来る結果となった。しかし、実は、そのようなおとな達の態度こそ問題なのであり、子どものパースナリティ形成に影響する重大な環境的要因となっているものと考え

られる。この場合、指しゃぶりをする子どもの環境的要因としては、通常、直接には、家族との関係、殊に主として母子関係が重要な部分を占めるのであって、一般的文化的パターンは、躾や養育のあり方などによって、間接的に母親を通して関係していると見てよいであろう。

ところで、このように幼児の指しゃぶりを精神分析理論との関連において、臨床心理学的にとりあげようとする場合、それは従来、方法的な問題により、容易に実証されがたいものであるとされて来た。というのも、指しゃぶりに関する理論的接近は、精神分析学者によって、ほぼ独占されて来たといえるのであるが、精神分析の理論そのものは、臨床心理学的に、実証される機会に恵まれず、研究の遅れが目立っているからに他ならない⁴⁾。

そこで、精神分析のパーソナリティ理論を臨床心理学的に実証する目的で、G. S. Blum は、ブラッキー絵画テスト⁵⁾脚注2) (The Blacky Pictures, 1950) を考案したのである。

本研究は、ブラッキー絵画テストの口唇期をあらわした二枚の図版 (Oral Eroticism, Oral Sadism) を刺激として用いることにより、(1)指しゃぶりが性本能の最初のあらわれである (Oral Eroticism) という精神分析的仮説を実証的に吟味し、(2)指しゃぶり児の母子関係の特徴を明らかにしようとした一つの pilot study である。

2. 実験

a) 被験者

実験は、昭和41年10月から3カ月間にわたって実施され、被験者は (第1表) に示されている。すなわち、3

才から6才までの幼稚園児・保育園児^{註3)} 111名から次の4つの基準により、指しゃぶり児が選別された。

- (1) 担当教諭・保育の日常観察
- (2) 母親の報告
- (3) 実験場面で指しゃぶりが観察された場合
- (4) 実験後の調査で被験者が指しゃぶりを報告した場合

その結果、指しゃぶり児42名をもって、実験群としたのである。

第1表 被 験 者

年 令	性	実験群	統制群	計	
3	m.	2	0	2	2
	f.	0	0	0	
4	m.	6	2	8	21
	f.	9	4	13	
5	m.	10	16	26	46
	f.	5	15	20	
6	m.	5	15	20	42
	f.	5	17	22	
計		42	69	111	

b) 実験用具

実験に使用した用具は、二枚の図版と記録用紙である。

(1) 図 版

刺激として用いた図版は、ブラッキー絵画テストの12枚の図版のうち、Oral Eroticism と Oral Sadism をあらわした2枚の図版である。これは Blacky という年齢・性のあいまいな黒犬が母犬の乳を飲んでいる場面 (Oral Ero.) と母犬の首環をくわえて興奮している場面 (Oral Sad.) を描いたものである。(図版参照)

この2枚の図版は、口唇期の二つの重要な特徴である Eroticism と Sadism を扱っているので、「指しゃぶり行動が、性本能の最初のあらわれである」という仮説を吟味する用具として妥当なものであるといえるであろう。また、これらの図版は、母親の犬とその子どもの犬との関係を中心に展開されているので、指しゃぶり児の母子関係の特徴を明らかにするために適したものであると考えられる。

(2) 記録用紙

ブラッキー絵画テストは、元来成人用のテストとして

標準化されたものである。しかし、G.S.Blum によれば、幼児にも充分適用できるものとされている。

本研究のための記録用紙は Blum の幼児用の教示⁵⁾ (suggested instruction for children's form) を基にして作成された。この記録用紙には、最初の教示 (preliminary instruction) をはじめ、質問項目 (inquiry)、自由作話 (spontaneous story) のための空欄、図版の好き嫌い (cartoon preferences) 及び、その他の調査欄が設けてある。

c) 実施手続

実施は、ブラッキー絵画テストの手続きに準じてなされた。この場合、特に被験者とのラポート (good rapport) が重要であるので、実験前に数回にわたる保育観察を行って、ラポートをつくりあげることになった。

(1) 最初の教示

まず最初に、図版 I (Oral Ero.) を被験者に提示して、次のように教示された。

「これは漫画です。これを見ながらお話しして下さい。これ*は、お母さん (またはママ) で、これ*は、ぼうやの犬 (男児被験者に対して) です」 (* は pointing の印)

(2) 図版の提示

以上の教示と同時に、図版 I を提示するのであるが、それには、次のような説明が加えられた。

「この犬* は、お母さんといっしょにいます」

次に、図版 I の終了後、図版 II についても同じような説明が加えられた。

「この犬* は、お母さんの首環をくわえています」

(3) 自由作話

図版の提示後、被験者が自由に作話出来るように、多くの場合、次のようにして作話を促した。

「何かお話を作って下さい」

「何でしょうか」

「どうしたのでしょうか」

「何しているのでしょうか」

この場合、被験者の作話反応が得られないならば、更に答えやすい質問に移った。

(4) 質 問

以下の質問項目は、G. S. Blum の幼児用質問項目に基づき、成人用の質問項目を参考にして、筆者が作成したものである。

図版 I の質問

(1) この犬* は、うれしそうですか。

◎ a) はい。

- b) いいえ。
- c) どちらでもない。
- (2) お母さん* は、うれしそうですか。
 - a) はい。
 - b) いいえ。
- ◎c) どちらでもない。
- (3) この犬*は、どのくらい長い間、ここ*にいたいと思っ
ていますか。
 - ◎a) 飲み終るまで。
 - b) いつまでも。
- (4) この犬* は、おとなになったとき、何よりも食べ
ることが好きになるでしょうか。
 - a) はい。
 - b) いいえ。
- ◎c) 他のことも好きになる。

図版Ⅱの質問

- (1) どうしてこの犬*は、お母さんの首環*にこんなこ
とをしているのですか。
 - (2) どのくらいしばしば、この犬* は、こんなことを
したいと思うのですか。
 - ◎a) めったにない。
 - b) ととき。
 - c) しょっちゅう。
 - (3) この犬*は、お母さんの首環*を、これからどうし
ようとしていますか。
 - ◎a) 捨てる。
 - b) お母さんに返す。
 - c) ずたずたにする。
 - (4) お母さんが来たらどうするでしょうか。
 - a) お乳を与える。
 - b) お乳を与えないで寝かす。
 - ◎c) がみがみいう。
- (選択肢の記号上に◎印のあるのは、理論的に neutral
なものである)。

(5) 図版の好き嫌い

質問の終了後、IとⅡの図版について、好き嫌いが尋
ねられた。共に好き、ないし嫌いと答えた被験者には、
どちらがより好きか、ないし嫌い、が更に尋ねられた。

(6) 同一視確認テスト

実験終了後、各被験者に対して、「この犬*は、牝犬に
見えたか、それとも牝犬に見えたか」という質問がなさ
れた。

(7) その他の調査

その他、次のような項目を母親に尋ねた。

- a) 出産時の両親の年齢。
- b) 哺乳は、母乳・牛乳・ミルクのいずれによったか。
- c) 離乳の終了時期。
- d) 偏食の有無。

3. 結果と考察

以上の手続きによって得られた分析資料は、まず第一
に、指しゃぶり行動の精神分析的仮説を吟味するため、
Revised Scoring System^(脚注1) に準じて総合的に処
理された。ところが、その結果は、統計的な有意差を認
めることが出来なかった。そこで次に、各分析資料を別
個に検討してみたところ、母子関係を意味する質問項目
Ⅱ(3)a)c) およびⅡ(4)a)c) において、統計的に有意な
所見を得ることが出来た。しかし、自由作話と図版の好
き嫌いの各反応では、顕著な所見を認めることが出来な
かった。

すなわち、指しゃぶり児の母子関係の特徴は(第2表)、
(第3表)に示されている。これによれば、指しゃぶり
児の反応傾向は、「ブラッキーが、ママの首環を捨てな
いで、ずたずたにする」(3)a)c) のであり、これに対
して「母親の犬は、ブラッキーにお乳を与えないで寝か
せてしまう」(4)a)c) のである。

また、この場合、同一視の確認テストの結果は(第4
表)に示されている。これによれば、女兒の被験者には

第2表 質問Ⅱ3、ブラッキーはママの首環を

項目	群	実験群	統制群	計	CR
a) 捨てる		8	27	35	2.118*
b) 返す		17	33	50	0.618
c) ずたずたにする		15	9	24	3.000*
計		40	69	109	

* P<0.05

第3表 質問Ⅱ4、ママはブラッキーに

項目	群	実験群	統制群	計	CR
a) お乳を与える		8	31	38	28.9***
b) 寝かす		21	30	51	0.005
c) がみがみいう		13	7	20	2.723**
計		42	68	110	

** P<0.01

*** P<0.001

幾分同一視し難い傾向が認められたが、 $\phi=0.623$ を得た。

第4表 同一視確認テスト

被験者	Blacky		計
	m.	f.	
m.	53	1	54
f.	22	32	54
計	75	36	108

$\phi=0.623$

以上のことから、指しゃぶり児の母子関係の特徴を即座に結論づけることは出来ないが、「母親の子どもに対する拒否的態度と子どもの母親に対する攻撃的行動」という母子関係を想定するのは容易であるといえよう。このような想定は、II(2)で「ブラッキーは、しょっちゅうこんなふうにしたい」という反応が、実験群に著しかった結果とも符合するものであると考えられる。

以上のように、結果は「指しゃぶり児の母子関係は、母親の拒否的態度と、それに対する子どもの攻撃的行動が特徴的である」ことが想定されるにとどまるものであって、指しゃぶり行動が Oral Eroticism を例示するものであるという仮説を裏付けることは出来なかった。しかし、統計的な有意差を認めることの出来た質問項目が Oral Sadism に多かったところから「指しゃぶり行動は、実は Oral Sadism を例示するものである」といえるのではないかと考えられる。もちろん、本研究の場合、被験者が3才以上の幼児であったことに注意する必要があるだろう。というのは、乳児であるならば、指しゃぶり行動は O. Fenichel⁹⁾ が述べている通り、Oral Eroticism を例示するものであるといえる。それに対して、本研究の結果は、幼児期における指しゃぶり行動が Oral Eroticism というより Oral Sadism を例示するものであるという新たな仮説を設けるのが妥当であることを示唆しているといえるのである。この場合、Sadism の対象(object relationships)となるのは、乳児期の Eroticism のように「指」そのものではなく、主に母親に対して向けられているものと考えられる。このことは出産時の両親の年齢の調査の結果(第5表)、年齢平均の有意差が父親の場合には殆んど認められなかったのであるが、母親の場合には、5パーセント水準で有意であることによっても示されているものといえよう。つまり父親よりも、母親との関係が指しゃぶり行動に影響する環境的要因であると考えられるのである。また次に、哺乳の調査では A. Bernstein⁹⁾ の観察報告と同じく、統計的には有意な所見を得ることは出来なかったが、(第

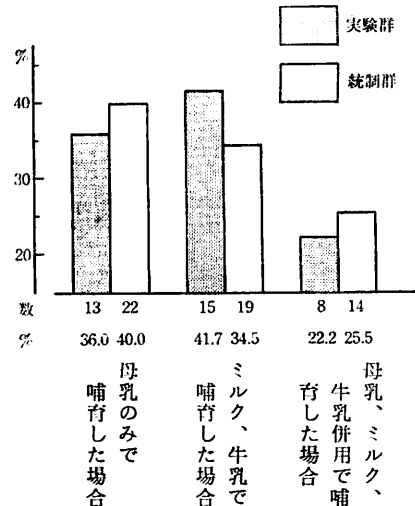
第5表 出産時における両親の年齢

群			実験群	統制群	検 定	
被験者数			39	60	Z	F
年 父	\bar{X}		30.8	31.5	1.000	2.228**
	σ		2.8	4.2		
令 母	\bar{X}		27.5	28.8	1.805*	2.445**
	σ		2.8	4.4		

* $P < 0.05$

** $P < 0.01$

1図)に示した通り、母乳に接したことの無い子どもの場合に、指しゃぶりをしやすい傾向が認められた。これもまた、指しゃぶり行動が、母子関係の影響によるものであることを示唆する結果ではないであろうか。



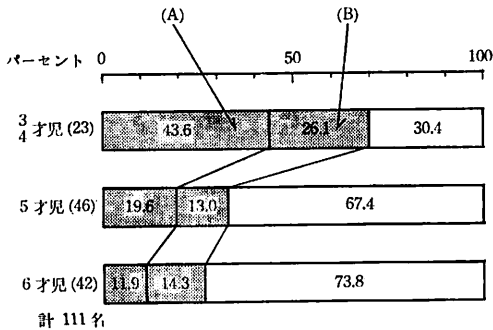
第1図 指しゃぶり行動と哺乳

ところで、本研究の結果からは、本研究の第一の吟味問題である「指しゃぶり行動が性本能の最初のあらわれである」という精神分析的仮説を実証することが出来ず Oral Sadism との関連が、質問項目の結果から示唆されるにとどまったのであるが、それには、次のような理由が考えられる。

第一に、本研究は、ブラッキー絵画テストの口唇期をあらわす2枚の図版を刺激として用い、実施も、ブラッキー絵画テストに準じて行なわれたが、12枚の図版から2枚の図版のみを切り離した結果、四つの分析資料のうち、実質上スコアリングされたのは、自由作話と質問に限られることになってしまった。つまり、総合的スコアリングが標準的方法でなされなかったことが、第一の理

由である。

第二に、しかも、自由作話は、5才未満の幼児では、充分な分析資料を得ることが出来ず、スコアリングを一層困難にした。これは(第2図)に示されている通り、5才未満の場合、(A)意味が不明瞭で、内容をとりちがえている資料、及び(B)無反応の資料を合すると69.5%にも及んだところからも明らかであるといえるだろう。もちろん、残りの30.5%の幼児の資料も分析に充分耐え得るものばかりとは限らない。ところが5才以上の幼児においては(A)、(B)を合しても20~30%と減少する。すなわち、G. S. Blumの「5才以上の幼児には充分適用できる」¹⁰⁾という記述が妥当なものであると考えられる。つまり、本研究において、約半数の資料は、スコアリング出来ず、また残り半数も決して全部が全部スコアリングに耐え得る資料であるとはいえなかったのである。従って、充分な所見を得ることが出来なかったものと考えられる。



(A) 意味不明瞭で内容をとりちがえている資料
(B) 無反応の資料

第2図 幼児への自由作話方式の適用可能性

その他、同一視の確認テストの結果(第4表)にも示されているように、刺激図版そのものの問題、あるいは質問項目の問題もその理由としてあげられよう、それは今後、ブラッキー絵画テストの我国での改訂・標準化が強く要望される所以でもある。

4. 結

本研究は、ブラッキー絵画テストの口唇期を描いた2枚の図版(Oral Eroticism, Oral Sadism)を刺激として用い、幼児の指しゃぶり行動を臨床心理学的に明らかにしようとした一つの pilot study である。

その結果、幼児期の指しゃぶり行動は、性本能の最初(Oral Ero.)ではなく、Oral Sadism を例示するものではないかという示唆を得た。また、指しゃ

ぶり児の環境的要因としては、母親との関係が重要であって、指しゃぶり行動は、母親の拒否的態度に対する子どもの攻撃的行動である、という所見を得たのである。

筆者は今後、ブラッキー絵画テストの改訂・標準化を目指して研究を進めてゆきたいと考えている。

(本稿につき、御指導、御校閲いただいた西谷謙堂教授に深謝致します)

脚注 1) O.Fenichel⁶⁾によれば、

“The beginning expression of the sexual instinct is the act of sucking...
An illustration is the thumbucking of the infant.”

これは K.Abraham が Oral Eroticism と呼んだ時期に当る。これに対して Oral Sadism は性本能の第2のあらわれであり、それは Biting によって例示される。Biting に関する研究では、筆者等の研究(乳幼児の咬みつき行動に関する研究、第14回小児保健学会総会における発表)がある。

脚注 2) ブラッキー絵画テストの概要
ブラッキー絵画テストは Gerald S.Blum によって1946年に考案された投影法(projective technique)によるパースナリティ・テストの一種である。

このテストの著しい特徴は、このテストの理論的基盤が精神分析理論にあるということ、分析診断の方法が後に述べるようにパースナリティの種々の層から分析資料を抜き出して、総合的力動的に診断しようとするところにある。

また、その目的とするところは、二つに分けて考えることができる。その第一は Blum が手引書⁹⁾の中で述べているように、疾病分類学(nosology)による診断というよりも、精神医や臨床心理家の治療活動を直接援助しようとする力動的診断や治療効果の評価の役割を果し、且つ治療活動に役立つ用具(source material for therapeutic process)として利用しようとするところにある。本テストは精神分析理論を基盤としているので、Rorschach Testとは違った面で役立つ筈である。殊に精神分析的立場をとる臨床家の場合には Rorschach Test 以上に役立つことが予想される。

次に、本テストの第二の目的は、本テストを各種領域の調査研究に適用し、役立てることである。実は本テストが最初に Blum によって考え出されたのは、この第二の目的のためであったという⁴⁾。つまり、Blum は精神分析理論の実証研究という目的のために本テストを案出したのであったが、更に、本テストを、精神分析理論の実証研究のためばかりでなく、Psychosomatic disorders の分野、治療効果の比較研究(例えば Rogerian と Skinnerian)、他の投影法に関する研究、社会学・人類学など(性、文化など)の研究に役立てようとしたのである。事実、その後、非常に広い領域にわたって利用されていることは、Psychological Abstracts (1949~) に掲載された論文数に

よっても推察されるであろう。

用具としては、12枚の図版と質問カード、及び記録用紙を用いる。

図版 (Cartoons) には、Blacky という名の黒犬を主役にした精神分析理論に基づく psychosexual development の各種の状況

(Oral Eroticism; 図版 I

Oral Sadism; 図版 II

Anal Expulsiveness; 図版 III

Anal Retentiveness; 図版 III

Oedipal Intensity; 図版 IV

Masturbation Guilt; 図版 V

Castration Anxiety (males); 図版 VI

Penis Envy (females); 図版 VI

Positive Identification; 図版 VII

Sibling Rivalry; 図版 VIII

Guilt Feelings; 図版 IX

Positive Ego Ideal; 図版 X

Narcissistic Love-object; 図版 XI

Anaclitic Love-object; 図版 XII

その他に Cast of Characters; 表紙があって、図版は全部で12枚となる) が描かれている。図版には Blacky の他 Papa, Mama, それにきょうだいの Tippy があらわれる。Blacky, Tippy とともに性があいまいに描かれているけれども、Blacky については、女子の被験者には牝犬として、男子の被験者には牡犬として提示され同一視を促進するのである。

その他、このテストは通常個別式に実施されるが、テスト実施上の便宜のために質問カード (Inquiry cards) が用意されている。

また、記録用紙 (Record blanks) には検査者の記録しやすいように教示、質問項目、図版の好き嫌い、家族調査などの欄が設けてある。

以上の三つの用具を使い、次の四つの分析資料を得るためにテストが実施される。

第1には自由作話 (Spontaneous story) であり、各図版についての story を被験者に語らせるのである。

第2には、このテストに特徴的な質問である。これは多肢選択式であり、その中のひとつの選択肢が理論的に neutral なものとなっている。

第3には図版の好き嫌い (Cartoon preferences) であり、各図版の好き嫌い、その中の最も好きな図版及び嫌いな図版の決定がなされる。

第4には各図版以降に語られる自由作話の中で、その図版と関連のある内容 (Related Comments on other cartoons) が資料となる。

以上四つの分析資料を基にスコアリングされるが、スコアリングについては、(1) Original Scoring System⁴⁾⁵⁾、(2) Revised Scoring System⁷⁾、(3) New Scoring System⁹⁾ がある。

Original Scoring System (1946~51) では、各四つの分析資料に対して理論的に妥当な基準があり、各次元は四つの資料を総合してスコアリングされるよう

になっている。

次に Revised Scoring System (1952~) は (1) を若干検討し直したものであり、スコアリングの方法は (1) と殆んど変わらない。

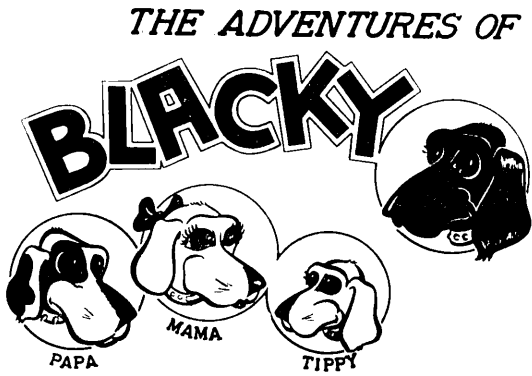
これに対して New Scoring System (1962~) は因子分析法によって抽出された30因子に基づいてスコアリングされるように工夫されたものである。

最後に、このテストの妥当性と信頼性についてであるが、これには可成り多くの研究が続けられている。妥当性については、特に construct validity が取りあげられて来ており、これには Blum 自身の研究⁴⁾をはじめとした一連の研究がある。とは言え Charen と Blum の論争 (1956) にも明らかなごとく、妥当性・信頼性ともに問題がないとは言えない。しかし、それにも拘らず、ブラッキー絵画テストは、臨床面・研究面の利用に充分耐えることができるものと考えてよいであろう。

脚注 3) 本研究の対象である保育園も、社会福祉事業法第二条に規定されている通り、第二種の社会福祉事業であり、従って、措置児が若干含まれている。しかしその割合は1割弱であり、しかも完全給食制である以外は幼稚園と殆んど変らぬ保育環境であると認められたので、幼稚園と同じように扱って反応資料を処理したのである。

文 献

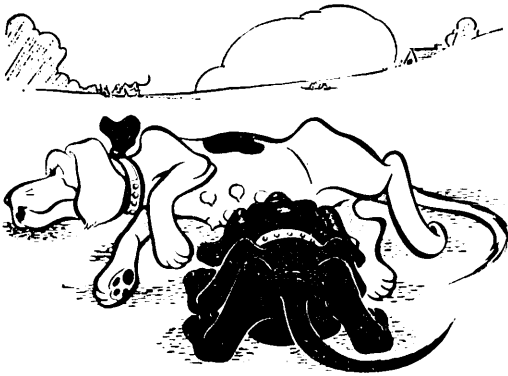
- 1) Leo Kanner (黒丸正四郎、牧田清志共訳) 児童精神医学、医学書院、1964
- 2) G.S.Blum, Psychoanalytic theories of personality, McGraw-Hill, 1953
- 3) S.Freud (安田徳太郎、安田一郎訳) 性と愛情の心理、角川文庫 (Three contributions to the theory of sex, New York, 1938)
- 4) G.S.Blum, A study of the psychoanalytic theory of psychosexual development. Genet. Psychol. Monogr., 1949, 39.
- 5) G.S.Blum, The Blacky Pictures, Ann Arbor, Michigan: Psychodynamic Instruments, 1950
- 6) O.Fenichel, The Psychoanalytic theory of neurosis, New York: Norton, 1945
- 7) G.S.Blum, Revised scoring system for research use of the Blacky Pictures, 1951 (Mimeograph)
- 8) A.Bernstein, Some relations between techniques of feeding and training during infancy and certain behaviour in childhood, Genet. Psychol. Monogr. 1955, 51, 3-44
- 9) G.S.Blum, A guide for research use of Blacky Pictures, J.proj. Tech., 1962, 26, 3-29
- 10) G.S.Blum, Blacky Pictures with children, in A. I. Rabin and M. R. Haworth (Eds.), Projective techniques with children, New York: Grune and Stratton, 1960, 95-104



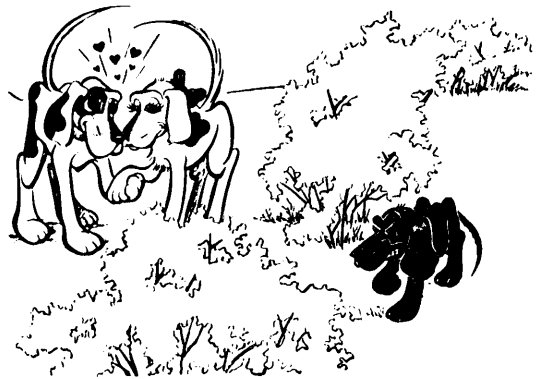
Frontispiece ; Cast of Characters



Cartoon III ; Anal Sadism



Cartoon I ; Oral Eroticism



Cartoon IV ; Oedipal Intensity



Cartoon II ; Oral Sadism



Cartoon V ; Masturbation Guilt



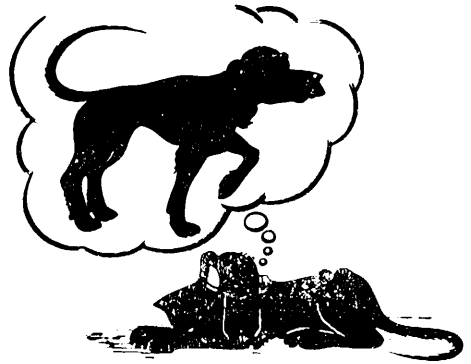
Cartoon VI; Castration Anxiety (Males)
Penis Envy (Females)



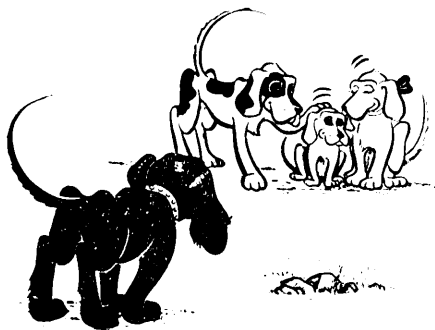
Cartoon IX; Guilt Feelings



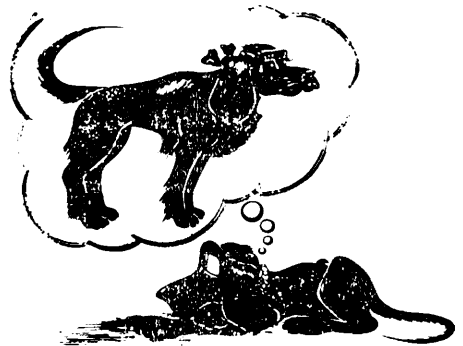
Cartoon VII; Positive Identification



Cartoon X; Positive Ego Ideal (Males)
Lobe-object (Females)



Cartoon VIII; Sibling Rivalry



Cartoon IX; Love-object (Males)
Positive Ego Ideal (Females)